

2018年度

# 学 校 評 価

神山町広野小学校

## 1 学校評価の実施にあたって

平成30年度、広野小学校では学校評価を次のように実施した。

- (1) アンケートに表された評価結果のうち、児童のアンケートであれば「よくあてはまる」「ややあてはまる」を、保護者であれば「はい」「どちらかといえば「はい」を、教職員であれば「そう思う」「ややそう思う」を良い評価として捉え、それ以外は悪い評価（反省すべき項目）と捉え、その要因を分析した。
- (2) アンケートを通じた児童、保護者の評価については、平成29年度との比較の上、今年度の教育について分析した。前年度を1つの基準とすることで、今年度の教育活動の正否がより明瞭になると考えられるからである。分析では、前年度と同様に評価が高いものについては触れず、前年度よりデータの的に優れていたもの、逆に劣っていたもの、前年度同様に評価の低かったもの、今年度の教職員が低い自己評価をおこなったものについて取り上げ、分析した。
- (3) アンケートの項目のうち、児童、保護者、教職員の3者に類似した内容がある場合は、3者のとらえ方の違いも分析する上での判断材料とした。教職員がよくできていると自己評価していたり、継続的に特に力を注いでいると考えている項目でも、児童や保護者が低い評価をくだす場合がある。そうした場合、指導のつめやアピールの仕方も含めて大いに反省する必要があるからである。
- (4) 上記のような方法でまとめたものを、学校を外部から観察していただいている3名の学校評議員の方に事前に送付し、3月初旬の学校評議員会の席でご意見を伺った。ここでご指摘いただいた内容についても教職員の反省を加え掲載した。
- (5) こうしてまとまった学校評価については、今年度中に広野小学校ホームページで公表する。

## 2 アンケート結果の分析

※別紙アンケート結果（グラフ）をもとに、平成30年度の本校教育について次のように分析した。

### (1) 「勉強時間、自分の考えを発表している」について

（アンケート該当項目：児童2，保護者1，教職員7）

前年度と同様、少数だがこれが十分にできていない児童がいることが分かった。保護者のアンケートには類似したものとして「授業中、子どもたちは自分の意見や考えを大きな声で発表出来ていましたか。」という問いがあるが、保護者の中にも十分でないと考えている方が少数いる。本校は、どのクラスも少人数で構成されているので、一人あたりの発表機会は他校に比べ多くなるはずである。そうであるにもかかわらず、このような評価があるということは、

- ①学習内容が全ての児童に分かるものになっていない。
- ②教師の発問が誰にでも分かりやすい表現になっていない。
- ③自信のない意見でも恐れることなく発言できるようなクラスの雰囲気がつくられていない。

などの理由が考えられる。教職員のアンケートの該当項目に「子どもの学習状況を把握し、分かりやすく楽しい授業に取り組んでいる」があるが、教師の評価は概ね高く、児童や保護者とのとらえ方が異なっていることが見て取れる。我々教職員はこの結果を謙虚に受け止め、改善していかねなければならない。今後の授業研究会においても、このことは克服すべき大きなテーマとして捉えていかねなければならないと考える。

### (2) 「家でも自分から進んで宿題をしている」について

（アンケート該当項目：児童4，保護者6）

この項目については、児童の自己評価は昨年度より高くなっている。しかし、児童の自己評価と保護者の評価を比較した場合かなりの開きがあり、この項目に対する保護者の評価はかなり低い。児童にとっては、放課後の教室や学童での学習も「家庭学習」と考えているのだが、保護者にしてみれば自分の目の届くところであまり勉強している様子を見られないから低い評価にしている、ということかもしれない。いずれにしろ充実した家庭学習は学年が上がるにつれ重要性が増す。より良い家庭学習の習慣化に向けて、学校で何ができるのかについて検討していきたい。

### (3) 「家や学校で読書ができている」について

（アンケート該当項目：児童3，保護者5）

まず児童のアンケート結果だけに注目してみた場合、この項目については前年度より劣っている。実際、学校においては、他の活動との兼ね合いで十分な時間が割けていないという現状がある。しかし、学力の向上や情操面の陶冶に読書が重要な役割を果たすことは多くの識者が指摘することでもある。行事の精選や休憩時間の有効活用、隙間時間の積極的な活用等で読書環境を整備するとともに、児童には今後とも読書の良さを啓発していきたい。一方、保護者アンケートの関連する項目として「子どもたちは毎日音読の練習（高学年は読書）ができていますか」というのがあるが、これについても昨年度より明らかに劣っている。やはり読書の面白さをまずは実感させ、自ら本を手にする習慣を身につけさせることが重要であると考えます。

### (4) 「勉強していることはよく分かっている」について

（アンケート該当項目：児童5，保護者3，教職員7，8）

これについては、児童の評価、保護者の評価ともに昨年度より良い評価になっている。しかし、「あまりあてはまらない」に○をつけた児童がいることも事実で、具体物での

作業や、ICT の活用など、全ての児童に分かりやすい指導の在り方について研修を深めるとともに、T 2 の効果的な活用等、個別指導の充実にも力を注いでいく必要がある。

**(5) 毎日朝ご飯を食べている**

**(アンケート該当項目：児童7)**

これは、家庭生活に関わることだが、前年度より劣っている項目である。朝ご飯の重要性については、学校でも、担任や養護教諭を中心に再々指摘していることではあるが、より長く眠っていたいという児童の欲求などが阻害要因となっており、十分に朝ご飯を食べずに登校している児童もいるようである。力のない表情、覇気のなさ、授業時間中のあくびなども、朝食の有無と密接な関係にある。早寝早起きの励行で十分な朝の時間を確保し、しっかりと朝食をとることを今後とも促していきたい。

**(6) 早寝早起きをしている**

**(アンケート該当項目：児童8)**

これについては前年度と同様、あまり好ましい状態にない。原因を探るための追加的な調査などは行っていないが、夕食後の長時間のテレビ視聴、長時間のゲーム、スマートフォンや携帯電話での長話などでまず就寝時刻が遅くなり、その当然の結果として朝早くには起きられないということではないだろうか。「朝ご飯を食べる」ということとも絡めて、改善を促していきたい。

**(7) 時間いっぱい一生懸命掃除ができています**

**(アンケート該当項目：児童9, 保護者4, 14, 教職員9)**

これについては、児童の評価をそのまま受け止めるなら、前年度より劣っている。しかし、保護者アンケートでは問4と問14がこれに類似した内容といえるが、いずれも前年度に劣らず高い評価をいただいている。また、教職員の評価も、児童の清掃時の態度については、どの児童も真面目に、一生懸命に取り組んでいるということで意見が一致している。児童の日頃の清掃活動を大いに賞賛することで、自己肯定感を育みたい。

**(8) 先生や友だちにあいさつができています**

**(アンケート該当項目：児童10, 保護者7, 教職員16)**

これについては、児童の自己評価と保護者、教職員の評価にかなりのずれがある。児童は、多くのものがそこそこ自分ではあいさつができていますというふうに加え、一方保護者や教職員は、その逆にあまりできていないと考えている。実のところ、学校でも、教職員からあいさつを仕掛けないと、あいさつの声が聞かれないという場面に何度も出くわす。そのあいさつの声も、恥ずかしそうに、低い声で返ってくるのが少なくない。

あいさつには相手の心を開かせるという意味がある。あいさつからコミュニケーションが始まり、心の交流が生まれるのである。今後児童が成長し、社会に出るような年齢に達した時、気持ちの良いあいさつが習慣化している人とそうでない人とでは、周囲の評価がまるで違ってくる。

このあいさつについては、折に触れて行うその意義指導とともに、教職員や保護者が一丸となって毎日繰り返し指導し、習慣化を図っていかねばならないと考える。

**(9) 学校は、インターネット上で学校ホームページを開設していますが、どの程度見えていますか。(A：ほぼ毎日 B：1週間に数回 C：1ヶ月に数回 D：ほとんど見ない)**

**(アンケート該当項目：保護者10, 教職員12)**

昨年度と比べると、「ほぼ毎日」とか「1週間に数回」というふうにはホームページを高頻度で見てくださっている保護者の割合が減少し、逆に「1ヶ月に数回」とか「ほとんど見ない」の割合が多くなっている。一方、学校ホームページの更新についての教師

側の自己評価については、「学校・学級便りやホームページ等により情報公開ができている」の項目に対して「そう思う」が12名中11名、残り1名も「ややそう思う」を選択しており、これはアンケートの全項目中最高の評価割合となっている。つまり、教師側は日々の学校生活の様子を積極的に情報発信できているという自覚があり、事実他校のホームページと比べてもページの更新頻度はかなり高い部類に入る。閲覧数の多さは更新頻度の高さと密接な関係があるといわれているが、本校はその意味では多くの方々に見ていただくための要件は満たしているのである。ではなぜ、熱心に見てくださる保護者の数が昨年に比べ減少しているのであろうか。あくまでも推測だが、次のような理由が考えられる。①忙しくなって、見る時間的余裕がなくなってきた。②見るための手段（パソコンまたはスマートフォン）をもっていない方が多くなった。③ホームページの質が昨年度と比べると落ちた。あるいは、みたいと思う内容でなくなってきた。④ホームページを継続的に見る必要性を感じない方が多くなった。⑤そもそも学校生活の様子がホームページ上で公開されていることを知らない方が多くなった。もしこれらの推測が正鵠を射たものであるとするなら、①～⑤のうち、教師側の努力で改善できるのは、③④⑤である。まず③については、やはり保護者にとって関心が高いのは、自分の子どものことだろうから、できるだけ多くの児童の写真が掲載できるように努める。また、文章も簡潔で分かりやすい表現になるよう執筆者各自が工夫する。④⑤については、より良い学校教育の推進のためには、保護者や地域の方々の協力が欠かせない。その協力を得る上で、日頃の学校での教育活動を知っていただくことは重要であると考え、我々教職員はホームページを更新し続けている。そういう趣旨を様々な機会を通じて伝達し、閲覧を促すことが肝要であると考えます。

### 3 学校評議員の方々によるご指導

本校の教育活動に関わる学校評議員の方々との話し合いは、1学期と3学期の2回実施した。3学期初頭には、保護者に対して行ったのと同様のアンケートを配布し、ご回答いただいた。3月6日に実施した2回目の学校評議員会では、このアンケート結果のまとめをもとに、本校教育について説明し、ご意見をいただいた。ご意見の趣旨は次のとおりである。

- (1) 家庭学習については、本校では、学童と家庭という2つの場所のみを想定しているが、最近の子どもは塾の学習室や図書館、ファミリーレストラン、喫茶店などを勉強場所として利用する場合がある。そこでそうした場所での学習も、親の了解のもと、家庭学習として認めた方がよいのではないか。
- (2) 規則正しい生活には親の協力が欠かせない。ゲームやスマートフォンの長時間使用は、学校と家庭が協力してルールづくりを進め、改善していく必要がある。また、起床時間が遅いことが朝のあわただしさにつながり、朝食抜きで登校するといった事態を招く。これも保護者を啓発し、起床・就寝時間を適正にするよう働きかける必要があるのではないか。
- (3) あいさつについては、確かに過去に比べて、気持のよい挨拶をしてくれる児童が減ってきているように感じる。過去においては、あいさつ運動を進めるなどの取り組みがあった。何らかの活動を取り入れて、すべての子どもが気持のよいあいさつができるよう習慣づけてあげるべきではないか。

これら学校評議員の方々からいただいたご意見を取り入れ、次年度の教育活動に生かしていきたいと思う。

## 4 2019年度の具体的な取り組み

### (1) 家庭学習について

新年度の組織が決まったら、低中高に分かれて、自主学習をどのように課すかを決定する。その際、次の事柄について共通理解する。

- ①学童で行う学習と家庭で行う学習を具体的に定め、保護者にも知らせて、徹底する。  
ただし、児童が特に勉強に集中しやすい場所が家庭以外にある場合には、親の了承のもとでそれも認めることにする。
- ②優れた自主学習をしている児童のノートを掲示するなどして、方法の分からない児童の参考にさせるとともに、良い刺激を与える。
- ③4月のPTA総会のあとの学級懇談会で家庭学習についての方針を伝え、1年間を通じて継続的に進めるようにする。その際、低・中・高学年ごとに、それぞれの発達段階に応じた家庭学習の分量や内容を協議し、2学年の共通理解のもとで保護者に伝達できるようにする。

### (2) 規則正しい生活について

- ①6月初旬に実施予定の家族参観日に講演者を招き、ゲームやスマートフォンの長時間使用がもたらす脳への害について語ってもらう。この講演は全ての保護者に聞いてもらい、現状に危機感を持ってもらう。その後、家庭での使用についてなにがしかのルールを設けるなど、過剰な使用を抑止するための具体的な手段を学級懇談や個人懇談等で話し合い実施する。
- ②登校時間が遅い児童がいる。その原因の1つに、本校の登校時間が全ての児童にきちんと周知出来ていないことが考えられる。そこで8:00が本校の登校時間であり、それより遅れた場合は遅刻であるということを年度当初にはっきりと伝える。それとともに、登校時間帯を7:30から8:00と定め、早く来れば8:10までは外で自由に遊ぶことができることも伝える。これは、定刻に登校することへの意欲づけと共に、規則正しい生活の奨励、友達と外で遊ぶ機会・時間の確保、体力づくり、健康の保持増進等をも併せてめざしたものである。

### (3) あいさつについて

- ①あいさつには人の心を開くという意味があり、円滑な社会生活を過ごす上で必要不可欠なものであるというあいさつの持つ意義を機会あるごとに、各学年の発達段階に応じて分かりやすく伝える。それとともに、あいさつの形として次の内容を児童に伝える。
  - 相手の目を見て、にこやかに、元気よく言う。
  - 自分から先に言う。
  - 誰にでも言う。
  - バスに乗ったとき・出るとき、教室に入るとき、廊下や道で出会ったときなど様々な場面で適切に言う。
  - 「ありがとう」「ありがとうございました」をいうときには、感謝の心をこめて言う。
- ②気持のよいあいさつができていない児童がいれば、その場で指導する。逆に良いあいさつができていない児童がいれば大いに褒める。これを全教職員が徹底する。